俳諧 深川集

芭蕉翁
洒堂選

へ 5
2190

明治四十一年四月二十七日
藤野□衛氏寄贈

門 へ 515
號 3:177
巻

俳諧深川集

壬申九月予江戸へ下り
芭蕉庵に
越年しく
そゞろしなれつゝ此
はし絶洛子
ゆきて風呂おもとく

洒堂

林氏蔵書
寺田氏図書
藤野潮氏遺愛之記
洒堂

深川夜遊

青くても有べきものを唐辛子　翁
提ておもたき秋の新鮭　洒堂
家の月欅乃木も片よせて　嵐蘭
坊主なりし寺の先よりかゝる　岱水
松山岩擬の瀬濁れ咲波里　堂
焙炉乃炭くべく深川舟　蕉
祝ひ日の酒くりかゝる小豆粥　名
ふすま掴むくあらふ池手　蒙

掛てよ窓のあかりを持結もや　蕉

揚巻嶺よ見捨る下駄は社家　裳

寒徹(トヲ)す山から竜が中かゐり　栄

正気散の葉風ぞあるよ　丸

目ぬきりれし川千石ハ志くやりて　蕉

きぬかけ汁に鏡おほゆ深　裳

灘海にふ蔵ちの音乃朝月夜　水

那智参河山の唐迷さ空　栄

弓もしめまくうたてる子息(ムスコ)とも　裳

荷とりに馬士ぞ海へとび込　蕉

町中(ナカ)参る井戸を赤く掘んとて　栄

喰も寺めつれ野にも静まる　水

草臥に地の端おりれ雉の霜　裳

娘し見ありれ古手ぞ買ふ　蕉

我が乃手笛吹きけハ懐しや　水

寮遊うくも鉦鼓もなる　蘭

山伏を切(ッ)てかけたる関の東　蕉

鎧をかねむれかね世乃中　裳

付(キ)合を皆上戸とく呑あ(ッ)し　栄

法くゝりしとあるゝ進澤之　水

斎物ぐ和尚は樽よ何ゆゝそ　雲
堂をさ出して行る道の大日　蕉
擌(ハゴ)揚て水田も覧る人声　水
莚片(チリ)荷よ鯨の節切　京
不断さッ池鯉鮒(チリフ)乃宿れ木綿市　蕉
ご残抱えこむ雲間のへつね　雲
米五升人が々まで花見せん　蘭
雉子の法ろてよききふ春料　水

草庵の留主

渡禰る縫挟十夜の庭若月　杉風
一のひあしに残る檽(タイく)　酒堂
馬かりて若卸裸背(ハダセ)家行裏踏て　曽良
朝乃いと寒れさげなむ雑賣ル　石菊
人聲も隣寺出る日のまきゆふ　桃隣
枝れ(イニシ)足ほぐ源松さ久しきな　宗波
中形の半着物も様なまく　筆
書佐ほく家鯰一ト　さら　風

蓮葉にちりそふ花の岸の杜若　雲

地をするばかり駕籠の振袖　良

又六人天台坊主いろつめく　菊

太刀長刀乃光る塀越え　濤

月出て八つの太鼓を打仕廻　波

蓆囲ひ時宜の夜逃秋の夜　螢

玉子吸ふ影もわびしき濁り酒　風

一歩入れし細布(サイフ)もあらぬ　菊

花の春小田原陣も早二の年　濤

陽炎ちらちら響る川筋　波

能因が咳も留(トヽ)らぬ鳳凰盤　良

秋逝に鏡ある僧の掛ものの　風

薪(マキ)一結ぬくても夜の雨まさり　螢

節季に寒き宮の編笠　良

おくりて茶の湯の料紙の絵　菊

ちらりけ後藤浮の吉田出濤　濤

雨くまれ空に月すむ　縫(イワミ)くも　波

追へ々々に絹のくゝり迄　螢

ひやかな中(ナカ)稲のちわを吹おとし　風

山吹の裏の紛も志海ける　菊

糸の塵かきたる指(ユビ)に選(エリ)とくや　良
　下京乃寺も轝(カヤ)く　波
まつりまる門の御堂行すがれ　濤
　皆ばらく〳〵は開く傘　風
あの男やうじやは道張出て閉(フサ)ぎ　雲
　猿河の田を人男も漏して　良
長持に行連ひとめ手花の盛　菊
　雲雀あきさる川声も濁りて　波

二日酒のし家殿が寄菜
　去年茶なき下戸に
　亭主乃仕合なる屋しし
　　　　　　　　　　洒堂
洗足にあとの流く寒ぶる娘
　錦館(タテ)ある婦名も有る里　許六
餝(ミツ)雛(サイ)階子乃縁代て出の本く　芭蕉
　春山香待七草もつけ川　嵐蘭
月の色水もの所小鮒うり　六
　築地罘(イトカ)に典樂れ鴛　雲

相國寺がらんの花盛りなく　菜
桃乃盞ゆるる蘇小か亭の子く　蕉
西施か影を雲流るゝ草かくれ　嵐
埋りし此石野中に沈める　六
きぬくゝに白骨乃頭に苗を生て　蕉
東ニ追手の月拝すゝきの　菜
妻籠る比楼に宿す露乃音　嵐
ぬかりの極杖遊覧よつく　六
余掛あ桃灯しかしは朝あらし　菜
汐ちかしかゝる星川の橋　蕉

村すむ田面(タヅラ)の艸乃ままに立テ　六
塚のつゝびれ荊る石原　嵐
薦(コモ)僧か師に廻りあふたれ来　蕉
なりき敗れし白川の家　菜
うたり行後撰の風流讀まし　嵐
又中孫かる四國めくりき　六
朝露に濡澄まてる藍の花　菜
よどまし狗よかゝる麦乃粉　蕉
馬くて我詠愁きつちよ井戸の端　嵐
月夜に髪我洗ゝ操(モミ)出し　六

火とぼしてくれあたりに寄かゝり　蕉
　先積かゝるやうしの物詣り　棠
薄(ウソス)りと門乃毛に降りく　六
　高説きようしく済(すま)せける　営
今むかし草羽織を着つれ立テ　棠
　其外(そのほか)手縫(?)に誰も隠す　蕉
夜(よ)頃月し来り吹ゆる堀の内　営
　日和も赤ふある二月朔日　六
ちる花に俳諧の鮑乃進ぜあて　蕉
　鍋(リ)樽(ギ)ならべ宮川のよこ　棠

支梁亭口切

口切に境の庭ぞなつかしき　はせを
　笋見たき藪の初霜　支梁
山からの笠に達する見事さよ　嵐蘭
　雉子野鳥乃あるくの路り　利合
旅人の齢戸月乃明けたり　洒堂
　大戸をあげて掛る裸身　岱水
鶏声の数経て甦て　桐奚
　何くるに橋を踏をかける　也竹

鶏(ミトリ)たつ六田(ムツ)の柳かり播く　渠

掛菜青やく寺大豆汁　蕉

細(コマカ)なる雨もちらる蝶乃羽縁　合

鐙かゝげ得る坊の椽二　裳

ばらくや鐵落しする石の上　水

物ぐさ乞食の此里出る月　宗

行雲の長門あたり旅さらく　裳

霧に狩衣ん一撥の錆(サビ)　渠

西日入ルあれ家庵れ留守居　竹

菅乃二葉の萌く浮めく　奚

色ぞ残バ去年の切抑よ思ひける　合

児よまつる釈迦堂乃醤　裳

咲しまく世ふ毎よりも稀盛　蕉

鳥あれなかどう枇杷の落葉　宗

凡(ホン)卑(ヒ)して鑽(トサス)をも物さき狼乃中ど　奚

清家よ須運とも杜歌町　竹

日盛み鰡賣ル聲残哀ちて鍋　裳

みよしの廣の奴ふ川に　渠

寝つきれ稲の雫に肩つし　合

生象黄(キバ)ミをる門おとみ坂　宗

皮剥(ハギ)の抱煮て喰ふ宵乃月　蕉
上毛吹るゝ白がらは鷺　奚
笹つなひ流しかけたる竹筏　竹
太刀もらひ升二荷ある祝　雲
物音も簾(スダレ)静におろしある　棠
盃手り籌(カゾユ)る　丸薬は数　梁
花ぢるは御室の遊乃人通り　奚
麦やく葉積は野八縁之　合

丸てたあかり籬小借とふきまく
淋草丸き嵐竹亭域談ひ辞よ
十句を吟ず與は是為人の残
杜しろく洛の田及残も借し
其迹を流ぐ
酒堂

荊株や冬田はらくへ乃婦丸雲　嵐竹
賢くは日手し城か置る鷹　芭蕉
衣ら川棒て馬乃寒うけく
蘘(コヘ)艸ー懐る道のきみかあ　北䴍

古戦場月も静にすみ渡り　嵐蘭
志ばし見送る我やれ笠　甕
はし汐の門出ははし舟まで　竹
寛成何方まで　霞に入虹　蕉
巻藁不肩中を過すちゞし弓　緄
多仙ゆかる廣州の俳手　棠
餅湯の釜迎し出す宮れ人　昌房
庭にかけ流る郷の桶漬　正秀
小作りれ間義しまを神あらし　臥高
鶏も啼かせ月待れ恵　探志

懐（フトコロ）にしぼれ涓の露こぼす　游刀
夜つゞく戴く三寶乃廚汁　野径
花の陰射来（ヨコ）を縞防ぐらん　去来
鎧に刎（ハネ）出上るちる雨　仝
暖まあと婦梳の耳ふさく　野童
い池ある小隅に芹の多き　仝
焼付る蛤葉乃鯛此月　史邦
飛に実ある入綫が破れ戸　仝
荒備の帽子つまやる秋乃通　景桃
古藪歩ゆる源左衛門家　仝

六月も綿の二葉に麦刈て　素牛

多葉粉餅子の小耕淋変　仝

操ありの操にさげたる操乃總　之道

しぐれに馬代下りる冬の日　仝

枝作る主にはしご代払く節く　車庸

二軒並て家のあきをし　仝

肉へよる加賀乃盛かゆかさるゝ　恕

女史かきぬく本膳の禅　刀

縁入まね山も公事なき花の雲　秀

古草若芽のもゆる赤土　高

星ふるれすゞみ起ぞむ去年の宮　經

蔵む夕顔の嵐うる衣　房

去る中　曲翠

梟の鳴止む池の荻葉の節

かげろふ君月の椽つたく　洒堂

新簀子先二番の發得生まるゝ　仝

赤手すりあちる千の佐云　翠

走ゆかる節句乃朝の気合　仝

餌簝巻鮎鮓揚る染付　嵒

淋草にたゞむどらりの下座敷　仝
娘し見の恋を晩鐘(イリアイ)まてく　翠
織君利とメく百つかへあれ　仝
母がむすこがてをあれづる　雲
まれまよ田の荒住けり漆順く　仝
蘭の穴をふさく二月　翠
花咲と鳴ゆよとりのひよくと　仝
豆ちぎるさまも色ある吉發　雲
佗しさや甲斐の夕来の小麦餅　仝
志がろよ蝿(ハエ)く赤き節次　翠

類あくをちがいて月城打あがめ　仝
悪七兵衛景清があきれ　雲
世の中ハ手間をいれば年寄て　仝
さぬくかくる月影の形り　翠
通天の紅葉も散らば初しぐれ　仝
箕手きりし大根の湯煮　雲
追おる浪も墨乃よしや寝て　仝
山がらの籠の掛るおきて釘　翠
菊ゆりて巻流くとなぶる　仝
恋をむかし川よ城下の月　雲

ゆふ蒼ね内より某師郁合て　仝
ところてん啜ゑ小刻立将　翠
笠羅乃里と見えさる帝の段　仝
何成ものろまがしく鳴　嵳
詩霞乃則をとてづえける四ッの緒　仝
ホーして干かぬる絹の下帯　翠
逗留の内をあくまで憎しむ　仝
門弟立流を幸とされの空　嵳
象なむ竜(イラカ)ゆんへたる増上寺　仝
潮よきころよ島蕎り　翠

忘年之書懐　素堂亭

節季候

笠季は我雀ならずや出立の那　素我

餅舂

とり梅や揚りそうて鶏の泊(ト)り　嵐蘭

夜祀

みちこれ先をゆかりける夜くもり　曾良

佛名

仏名や饅頭を香の薄りけり　酒堂

歳暮

猿中比反古見分ン年のくれ　素堂

餘興

やよし文盃ニ桃花見ん　酒堂

操ニ京にも琵琶の小うらし　素堂

霄の月よく寝ル宿ニ宿りて　芭蕉

深川集終

右深川集ハ累年篋中ニ秘蔵せしを
書肆の懇望ニより梓ニ属するもの
なり

東都　西村誉魚識

元文元年丙辰九月吉日

書肆
京五條橋通
西村九郎右衛門
江戸本町三丁目
西村又右衛門板